



# まゐとりの मैत्री

No. 3 平成20年度 正月号—2008. 12. 25—  
東洋大学仏教育年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

## नववर्षाभिनन्दनम् (謹賀新年)

仏教会会長 渡辺章悟  
仏教青年会会長 櫻井宣明

### 東洋大学の史跡の地を歩く 10月18日(土)

10:00 東洋大学正門前に集合、駒込蓬萊町校地跡探訪

10:36 バス乗車 (約10分)

11:00 湯島の霊雲寺、麟祥院 → バス乗車

(麟祥院前の湯島四丁目バス停から錦糸町駅行き、  
石原一丁目バス停下車) → 両国付近で昼食

→ 両国公園内の勝海舟生誕地の碑を見学

(バス停から両国公園までに、東京都慰霊堂、  
江戸東京博物館、両国国技館、回向院、  
本所松坂町公園、吉良邸跡)

→ バス乗車 (緑一丁目バス停から亀戸駅行き、本所吾妻橋バス停下車) → 勝海舟銅像を見学

17:00 過ぎ終了 アサヒビール直営店で懇親会



10月18日(土)、私たちは湯島の霊雲寺や麟祥院から両国の勝海舟石碑や江戸東京博物館まで、東洋大学にゆかりのある史跡を巡った。

文京区湯島に江戸時代の名刹として有名な霊雲寺(真言宗霊雲寺派)がある。ここで、教学部長をされている羽生さん(インド哲学科の先輩)に、霊雲寺の縁起の概略や寺宝の曼荼羅について詳しく説明して頂いた。

麟祥院(臨済宗妙心寺派)は、徳川3代将軍家光の乳母春日局の菩提寺として知られている。学祖井上円了が、1887年にこの地に哲学館を創設し、これが後に東洋大学となる。山門左に〈東洋大学発祥之地〉の石碑がある。この石碑の前で記念写真を撮ったあと、亀戸に移動し、昼食をとった。あっさりサクサクでおいしい「亀戸餃子」は美味かった。

(次頁に続きます)

#### 【目次】

東洋大学の史跡の地を歩く	……1	コラム「仏教人物列伝」②	……6
第24回世界仏教徒会議日本大会	……2	コラム「日本文化と仏教」②	……8
前田専學先生講演録③	……3	書籍、イベントの紹介	……9
講演「モンゴル仏教の今」	……4	今後の活動予定	……12

三恩人の一人である勝海舟の生誕地界隈は、ツアーガイドをされた出野尚紀先生の地元でもある。吉良邸跡や時津風部屋などをサクサクッと見る。水上バスに乗り、浅草へ向かう。勝海舟について、渡辺先生・出野先生からレクチャーを受ける。

懇親会参加者は、アサヒビール直営店のおいしいビールを飲み充実した1日を振り返った。史跡を巡る会の様子について記念写真が、HPにありますのでご覧ください。

(文学部インド哲学科4年 南浩一)

## 第24回世界仏教徒会議日本大会にボランティアして

11月14日(金)～17日(月)

第24回世界仏教徒会議日本大会が11月に東京浅草で開催され、私はBEP(仏教英語プログラム)の一員としてボランティア活動をさせていただきました。

日本での開催は30年ぶりということを知り、留学生としてこのような素晴らしい大会に出られる機会を得たことを本当に心から感謝し、光栄に思っています。

世界各国からたくさんの仏教徒が集まり、言語や服装も様々でした。参加者の中では英語が共通語となっており、なぜサンスクリット語が仏教徒の共通語にならなかったのか疑問に考えたこともありましたが、英語がやはり世界に通じる言葉であり、世界に通じるには英語が必要だと痛いほど感じました。



本大会にはモンゴル国・ロシアのブリヤート共和国からも会員が参加していましたが、残念ながら私の生まれ故郷内モンゴルからは一人もいなかったのが、非常に寂しいことでした。モンゴル国・ブリヤートモンゴルから参加した会員の話では「ソ連時代はスターリンの制圧で仏教文化が台頭できなかったが、民主化した今では自由が得られた、しかし内モンゴルでは自由というものがまだ促進されてないですね」と語っていました。

モンゴル国のブルブドルジ・ラマとブリヤートモンゴルのセブデンジャブ・ラマと会い、モンゴル仏教について話をしたのが良い勉強になりました。両氏とも私と同じく二十代の人でした。ブルブドルジ氏は日本の大学に留学中で、モンゴル仏教について研究を進めていらっしゃるそうです。一方、セブデンジャブ氏はインドで留学僧として七年間勉強し、今はブリヤートでモンゴル仏教の復活事業に携わる仕事をしています。セブデンジャブ氏はモンゴル語はもちろんのこと、それ以外にも英語・チベット語・ロシア語が堪能でした。同年代として、勉強・研究に欠かせない言語をマスターしていることに大変驚き、非常に羨ましく思いました。私も一層頑張らないといけないと改めて実感し、またとない勉強になりました。

最後に、今回のビッグチャンスを与えてくださった東洋大学の渡辺章悟先生、並びに全日本仏教会の先生方々に心よりお礼申し上げます。

(大学院仏教学専攻博士前期課程2年 Ulziijargal)

## 講演「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と仏教」

(財) 東方研究会理事長 前田専學 (講演日時：2008年4月23日)

### 第三回

#### むすびーハーンの仏教観



彼が日本に求めたものはいろいろだろうと思いますが、その中のひとつが仏教であったでしょう。それと思想的なバックボーンにはもうひとつ、ハーバート・スペンサーの影響があります。

(ハーバート・スペンサー：Herbert Spencer 1820-1903 イギリスの哲学者・社会学者。あらゆる事象を単純なものから複雑なものへの進化・発展したとして捉え、生物・心理・社会・道徳の諸現象を統一的に解明しようとした。その哲学思想は明治前半期の日本に大きな影響を与えた。主著『総合哲学体系』10巻。富山大学所蔵のハーン寄贈書のなかにも含まれている)

最後に、ハーンの仏教観の一端について述べたいと思います。

ハーンには『涅槃』(Nirvana)と題する作品があります。三年間熱意を込めて書いたものですが、ここで彼は西洋における「涅槃」の理解は間違っていると実証しています。仏教の代表的な教えである無我説を取り上げ、無我説は道徳的に価値の高いものであり、重要な教義にあるにもかかわらず、西洋の思想家たちは正しい評価を与えていないと指摘しているのです。

また彼は、西洋人の考えるエゴ(我)は、われわれの感情・観念・記憶・意思を意味するものであり、これは確実に信頼できる永遠の靈魂にほかならない、そういうのが西洋的な考え方であると述べ、仏教徒は西洋人の言うエゴ(我)は悉く偽りであると考えている、仏教的な考えでは、「我」を人間の肉体的・精神的経験によって作られた感覚・衝動・観念のほんの仮に結ばれた集合体にすぎないと考えている、即ち西洋人は我を實在のなかで最も信頼すべきと考えているのに、仏教徒はそれを夢・幻・幻影、或いはあらゆる悲しみとか罪業の根源であるといっている、と述べています。西洋に根強い仏教と相反する思想が如何に多くの人類の不幸を引き起こしているか、と批判しているのです。

他にも、文章をいくつか挙げてみますと、

「仏教の教えと正反対な信仰一つまり固定したものがあるといふ妄想、言い換えれば、性格、身分、階級、信条

の区別は、ある不変の法則によって定められているという妄想—不変で不死である有情の靈魂は、神の気紛れによって、永遠の幸福か、永遠の煉獄へ行くように運命づけられているという妄想—これらの妄想から、如何に多くの人類の不幸が起こっていることであろうか。」

この言葉にはカトリックと決別したハーンの心境がみられます。

「疑うまでもなく、神というものは、怨みをもたらしたら最後、どこどこまでも怨みつづけるという観念—罪は償うことができず、罰は切り捨てがたいという観念—このような観念は、社会の進歩がずっとまだ未開な時代でなければ、価値のない観念であって、これからますます進歩する未来の人類進化の道には、そんな観念は、お払い箱になってしまうにきまっている。」

「東洋思想と西洋思想が接触することによって、そのような西洋的な観念が一日も早く衰滅し、明るい結果を招くことが望まれる。そんな西洋的な観念の発達させた感情が、われわれのなかに尾を引いている間は、本当の意味の寛容の精神 (true spirit of tolerance) なぞ生まれるわけがないし、真の人類同胞 (human brotherhood) の観念も、世界愛 (universal love) の目覚めも、起こりっこないのである。」

(*Nirvana, Gleanings in Buddha-Fields*, Charles E. Tuttle Co., 1971, P228)

このように、永遠不滅の自我を認めず、階級、民族の差別を認めない無我の立場にたつ仏教の今日的・未来的意義を強調しているわけです。

近年、安易に自我の確立が言われておりました。西洋的な自我を日本人が猿真似のように強調する人もおりましたけれど、西洋的な自我の行き着くところは、今日の世界のあちこちに起きている紛争です。究極的には人類の滅亡を導くことになるだろうと思われまます。ハーンが百年以上前に無我説の今日的意義を見出し、東洋思想を西洋思想が一日も早く手を結ぶことを望んでいたことは、驚嘆すべきことだと思います。世界の状況が、グローバル化が進み、多くの民族が緊密に接しあう時代になりますと、東洋大学の<共生の思想>理想の実現が勝利の気運となってきました。ますます仏教の無我説が重要な考えになってくるのではないかと、思います。

ハーンについて東洋学インド学仏教学の視点から研究は、従来なされてきておりませんでした。ハーン研究は盛んでございますけれども、思想面の研究はまだまだでこれからという状況です。英文学の領域からハーン研究へ入る方があるかもしれませんが、研究の余地がまだまだあるのだ、ということを皆様方に申し上げて本日の拙い話を終えたいと思います。

(前田専學先生の講演録は今回を持って終了となります)

## 講演「モンゴル仏教の今」(第6回定例全体研究会)

10月25日



2008年10月25日にモンゴル仏教を専門とするバイカル(桜美林大学准教授)とエルゲニバヤル(内モンゴル大学教授)の両先生をお招きし、モンゴル仏教について講演していただきました。以下はその講演内容の報告です。

### 1、「モンゴル仏教の今」

バイカル(桜美林大学准教授)

先生は始めに、モンゴル仏教は、主にモンゴル国、中国モンゴル地域、ロシアのバイカル湖周辺のモンゴル地域(ブリヤート共和国を含む地域)とカルムイク共和国などの広い地域の人々に信仰されていることを指摘しました。その後、本講演の趣旨でもあるアメリカのチベット・モンゴル仏教センター、ロシアのモンゴル仏教の総本山イヴォルギンスキー・ダツァンと内モンゴル第12世ウラーン・ゲゲーンの転生したことについて話しました。

アメリカのチベット・モンゴル仏教センターは、ダライ・ラマ法王が1979年インディアナ州に設立して、2005年「チベット・モンゴル仏教センター」と改称しました。その主な仕事は、仏教を西洋に紹介、布教することとチベットの人々のために文化活動を行う及び、カルムイク、ブリヤート、トゥバとのモンゴル仏教文化の保護事業を支援するなどの三つであり、現在の責任者はアジャ・リンボチェ(アムド地域出身のモンゴル人)です。

ロシアにおけるモンゴル仏教の総本山イヴォルギンスキー・ダツァンは、1945年ブリヤードモンゴルに設立され、宗教の自由がなかった当時唯一のソビエト連邦における仏教の中心地でありました。全ロシアのラマ僧のリーダーであるバンディド・カンボ・ラマも住んでいました。

次に、内モンゴルにおける最初の活仏転生活動に話しました。2004年3月30日、中国仏教協会副会長、中国政治協商委員会委員、内モンゴル自治区仏教協会会長ウラーン・ゲゲーンが85歳で亡くなりました。彼は、オロドス市イジンホロ旗吉祥福慧寺の第11世活仏であって、亡くなる一ヶ月前に政府に第12世活仏を転生させることを政府に申請しました。その同時に彼は「オロドス市イジンホロ旗を中心として、遊牧地域から転生させてください」と話しました。ウラーン・ゲゲーンが亡くなった後、オロドス市と自治区政府宗教事務局が積極的に動き、いわゆる「靈童」を捜しました。オロドス地域から1000人の子供を対象として詳しく調査して、最終に北京の雍和宮(仏教寺院)において、厳選された三名の候補者から12世転生活仏を選びました。2008年9月23日に、政府が選ばれた四歳の「靈童」を第12世ウラーン・ゲゲーンであることを承認し、最大な「座床」儀式を行い、「活仏証書」と「活仏印」を発給しました。

最後に、バイカル先生は昨年、内モンゴル大学ジャラサン教授(内モンゴル仏教協会会長)の支援により、新聞出版局、内モンゴル政府宗教局の許可を得て、今年の9月によく『仏教聖典』が出版できたことを報告しました。

## 2. 「モンゴル人におけるチベット語で書く伝統及びその著作」 エルデニバヤル(内モンゴル大学教授)

モンゴルの文字学において、チベット語で書く伝統は非常に長い歴史を持ち、モンゴル人自身の母語であるモンゴル語における文字学と同時期に成立しました。その主な根拠は、モンゴルにおける最初の年代記である『元朝秘史』の書かれた年代は、ちょうどモンゴルとチベットの文化交流の最盛期であるからです。一般的に、モンゴルとチベットの文化交流は主に二期に渡って成立したと考えられます。第一期は、1246年8月リャンジュ(現在青海省武威市)において、チベットから来たザヤ・パンティタ・グンガジャルサンが当時モンゴル帝国のオグタイ・ハーンの息子グダン・ノヤンと会見したことから始



まります。第二期は、1578年5月に青海省のチャブチャルにおいて、トメット部のアルタン・ハンが、ゲールグ派の指導者ソナム・ギャムツォと会見しました。これによって、アルタン・ハンがゲールグ派の施主となること

を表明して、ソナム・ギャムツォにダライ・ラマの称号を贈りました。これをモンゴル・チベット文化交流の第二期といいます。

モンゴルとチベットの文化交流によって、チベット仏教がモンゴル地域に広く伝わりました。これによって、多くの若者が出家して、さらに学問を深めるために、チベットへ留学するようになりました。こうして、モンゴル僧侶はチベットへ修行して、チベット語を学ぶ、あるいはモンゴル地方の仏教寺院でチベット語を学ぶ傾向がモンゴル全地域に広まりました。そのため、モンゴル人におけるチベット語で書いた著作が多く現れるようになりました。

モンゴル人におけるチベット語で書く伝統は13世紀の元朝時代から始まりました。その代表的な人物は、ソナム・カラ、チョギオドセルなどがあります。特にチョギオドセルのチベット語で著した『シャガム二十二功業』がとても有名であります。16、17世紀はモンゴル文学の最盛期であったにもかかわらず、モンゴル語による多くの経典が翻訳されて、さらにチベット語による数多くの著作が現れました。その代表的な学僧はシレート・グーシ・チョルジ、グンガオドセル、ナムハイジャムソなどです。特にナムハイジャムソは生涯180ぐらいの経典をモンゴル語に翻訳して、さらに200巻ぐらいの著作をチベット語で著しました。18、19世紀は、モンゴル人におけるチベット語で著作を著す最盛期になった時代です。この時代の代表的な学僧は、イシバルジュル、ロブサンツォルドム、ジャンジャ・ロルビドルジなどです。例えば、イシバルジュルは1704年に青海省に生まれて、生涯にわたって、仏教のあらゆる分野について8巻におよぶ全著作をチベット語で著して、今でもモンゴル・チベットの仏教学者の間に高く評価されて、広く研究されています。

不完全な統計によると、モンゴルにおけるチベット語で著作したモンゴル僧は約208名です。これらモンゴル僧たちの著した著作は今主に、中国内モンゴル自治区、青海省、チベット、媯肅省、初姫の替嫫帥堵などに保存されています。国外において、ロシア、モンゴル、ドイツ、イギリス、印度、など国々の国家図書館に保存されています。国内と国外を合わせると500巻ぐらいの全著作が保存されています。

(大学院仏教学専攻博士後期課程1年 オーダム)

## ～ コラム「仏教人物列伝」② ～

### ゴータマ・ブッダ その二

④出家——前号でも少し触れていますが、菩薩が生まれた後、7日でマーヤーは亡くなってしまい、三十三天に昇ったとされています。このことは諸仏の常法とされ、仏たる者、みな生まれてから七日でその母を失わなければならないと信じられていました。少しいじわるな解釈をすれば、母が存命である人は今生では仏にはなれないこととなりますので、「私は死ぬまでに仏になれるかもしれない」と思っている人は、自分のお母さんが存命であればあきらめてくださいということになってしまいます。

妃を失ったスドーダナ王は、マーヤーの妹とされるマハーパジャーパティー・ゴータミーを新たに妃に迎えます。マハーパジャーパティーは菩薩の乳母を務めたようです。後に女性最初の出家者になりました。スドーダナとマハーパジャーパティーの間にはナンダが生まれています。この釈尊の異母弟ナンダも後に出家しますが、その出家譚はたいへん有名です。いずれこのコラムで取り上げたいと思います。

少年期の菩薩は、仏伝文学では、文武両道において超人的に傑出していたように伝えられています。勉学に関しては、学校に行っても先生より多くの種類の文字を知っていて（その中には漢字も含まれています！）学ぶことなどさらになく、加えて新たにブラーフミー文字を創始したとか、スポーツでは誰にも引けない弓を引いたなど、とにかく完全無欠の少年として描かれ、婿選びの競技において優勝して妃を獲得したとされています。

ここでひとつ有名な話について言及しておきます。菩薩が婿選びの競技の開催場所に出かける際に、立派な象が用意されていたのですが、いつも菩薩をライバル視して、憎しみにも近い嫉妬を抱いていたデーヴァダッタが、その象を撲殺してしまいます（デーヴァダッタも超人的な腕力をもっています）。ここで、現代的にアレンジされた仏伝では、菩薩が象の頭を撫でると、死んだ象が蘇生するなど物語られるのですが、本来の伝承では全く違います。象の死骸が往来を塞ぎ、人々の迷惑になっていたため、そこを通りかかった異母弟のナンダがこれまた怪力で、象の死骸を引きずって脇に寄せます。そこに菩薩が出てきて事の顛末を知り、まずナンダを称賛した後、菩薩は象の足の親指にひっかけて蹴りあげ、死骸ははるか遠く城壁の外まで飛んで行ったなどという、なんとも現代的感覚にマッチしない物語になっています。菩薩の優しさではなく、菩薩の超人的な、デーヴァダッタとナンダを凌ぐ怪力に焦点が当てられているのです。釈尊は成道後にもしばしば超人的な怪力を現すことがありますが、それらを神通力の描写と混同しないように注意しなければなりません。

そしていよいよ結婚ですが、日本でもっともよく知られている菩薩の妃の名は「ヤショーダラー」でしょう。しかしながら菩薩の妃に関しては諸伝あって、名前についてもいろいろな名前が伝わっています。南方上座部に限っても「ヤソーダラー」、「バッドカッチャナー」、「ビンバデーヴィー」といったものが挙げられます。もっとも南方上座部では「ラーフラ・マター」（ラーフラの母の意）が一般的な呼称ですが。

北伝では、菩薩妃を一人しか挙げない伝承は、妃の名を「ヤショーダラー」とするものと「ゴーパー」（ゴーパー、ゴーパーとも）とするものの2種に大別できます。また菩薩に3人の妃があったとする伝承も複数あります。その場合、3人の名は「ヤショーダラー」、「ゴーパー」、「ムリガジャー」といいます。

菩薩妃の人数について、実をいえば、「一人しかいなかった」とする伝承は皆無です。一人しか言及されない場合でも「ラーフラの母は第一王妃であった」などと複数の妃がいたことを含意しているものがあります。では3人説にはどれくらいの根拠があるかといえば、これもどうやら「菩薩には三つの季節に適した三つの宮殿があった」とする聖典の伝承からおのずと導き出されたもので、史実の反映とは限りません。各三時殿に一人ずつの妃を配ただけかもしれません。また3人の名前が伝承の新しさを暗示しています。なぜなら別々の起源を有する3人の名が後に統合されたことが推測できるからです。3人説ではラーフラを生むヤショーダラーが正妃ですから、「ヤショーダラー」を妃とする伝承に後から「ゴーパー」を正妃とする他の伝承が取り入れられたのでしょう。「ムリガジャー」の起源も別に求めることができます。

ムリガジャーは「讚涅槃頌」をとなえて菩薩から首飾りを贈られ、それを見ていたスドーダナ王が菩薩の心を誤解して、彼女を菩薩の後宮に入れてしまいます。「讚涅槃頌」とは「ああ、この方（菩薩）の母は幸せです。父も幸せです。ああ、この方を夫とするだろう女は本当に幸せです」というものです。ここで「幸せ」という言葉が、原語では「涅槃」をも意味しており、ムリガジャーが「幸せ」と言ったのを、菩薩が「涅槃」と聞いて喜びます。

南方上座部の伝承では、この頌を唱えるのは「キサー・ゴタミー」で、菩薩の従妹とされる女性で、菩薩の妃ではありません。説出世部の伝える『マハーヴァストゥ』では、これを唱えるのは「ムリギー」と呼ばれる女性で、阿難の母とされます。また名の伝わらない女性が唱えたとするものもあります。3人の中で最後に娶られるムリガジャーは、「讚涅槃頌」を唱える女性が後に妃に格上げ（？）されたもののようです。

菩薩妃についてはこれぐらいにしまして、次に息子のラーフラです。菩薩が四門出遊を経て出家を志す物語はここで述べるまでもないでしょうが、出家の決心を固めた菩薩が、ラーフラの誕生に際し、「束縛（ラーフラ）が生じた」と述べ、これが息子の名の由来になったという伝承がよく知られています。しかしながら「ラーフラ」が「束縛」とか「障碍」とかを意味することは実は、言語学的に説明が付きません。日食・月食を引き起こす悪魔の名が「ラーフ」ですが、そこから説明しようとするのはいささか強引に感じられます。そこで日食か月食が起きている時に誕生したのであろうとか、日種族に属する釈迦族の家系を結果的に断ち切ってしまう故に「ラーフ」と関わる名前を付けられたのであろうとか、いろいろに推測がなされています。ちなみに『ブッダチャリタ』で名高いアシャヴァゴーシャ（馬鳴）は「ラーフラ」を「ラーフの敵」と語源解釈し、すなわち「月」という名を付けられたのだと解しています。

またラーフが生まれたタイミングについても大きく2種類の伝承があります。出家の前とされる南伝の伝承が一般に知られていますが、日本にも伝った北伝では釈尊の成道と同時とします。これは同時にラーフラが母胎に6年間宿っていたとする伝承です。当然のことながらヤショーダラーは貞節を疑われてしまい、赤子を岩にくくりつけ「この子が菩薩の子であれば水に沈まない」と宣言して池に投げ込むことで、潔癖をはらすという物語がくっつきます。

実際の出家の記述は次号になります。

(インド哲学科講師 岩井昌悟・仏教会事務局長)

---

## ～ コラム「日本文化と仏教」② ～

### 紫式部墮獄説と観音化身説

『源氏物語』が書かれて千年の平成二十年は、出版や講演・公演など多彩な催しが行なわれたが、作者の紫式部(生没年不詳)は『法華経』を学んで天台教学に精通していたようだ。作中、何度も法華八講が重要な場面設定に使われ、源信(942-1017)がモデルとおぼしき「横川の僧都」も登場する。そして登場人物の女性たちの多くが愛憎に苦しんで出家し、やっと心の安定を得るのである。その切実な思いと濃やかな情感が多くの読者を獲得したことはいままでもない。

だがその一方で、物語や和歌などの文学作品は人の心を惑わす狂言綺語として非難の対象でもあった。

「深窓未嫁の女、之を見て懐春の思ひを偷動し、冷席独臥の男、之を披って思秋の心を徒勞す」(『源氏一品経』)若い娘はうっとりして春情をもよおし、独り寝の寂しい男はますます意気消沈してしまうというのである。

平安時代末になると紫式部は人々の心を惑わした罪で地獄に墮ちて苦しんでいるとされるようになり、彼女の魂を救うための追善供養が歌人や僧侶、公家ら文化人の間で流行した。それが源氏供養(法会)といわれるもので、『法華経』二十八品を一品ずつ分担して書写して持ち寄り、各品に源氏物語の巻を当ててそれを織り込んだ歌を奉じて供養したようだ。そこで奉じられた『源氏一品経表白』『源氏物語表白』『源氏願文』などが今日に伝わり、謡曲にも『源氏供養』がある。

百人一首の編纂者で勅撰集の撰者であった藤原定家の家でも、しばしば宮廷に仕えていた実姉らが主催し、一族が集まって源氏供養をおこなった。定家の甥にあたる信実の作とされる『今物語』にもこんな逸話がある。

「ある人の夢に、正体不明の影のようなものが見えるので誰かと尋ねると、紫式部と名乗り、虚言ばかり多く集めて人の心を惑わしたために、地獄に堕ちて苦を受けていて耐え難い。源氏の物語の名を具して南無阿弥陀仏という歌を巻ごとに人々に詠ませてわが苦しみを弔ひたまえ、と訴えた。どのように詠むべきかと訊くと、〈桐壺に迷はん闇も晴るばかり なもあみだ仏とつねにいはなん〉と詠んで消えた。」

物語や詩歌を作ったり鑑賞するのを誡める風は、天台座主円珍(814-891)が初という。源信もやはり詩歌を嫌っていたが、ある時、比叡山の自坊から眼下に明け方の琵琶湖を眺めていて、湖面を漕ぎ行く小船の姿は消えても白波の跡は残っているという歌を聞き、「和歌は観念(観法)の助縁となりぬべかりけり」と限定的ながら考えを改めたという話が『袋草紙』や『発心集』などにある。

それに呼応するかのように紫式部擁護説も登場した。観音菩薩化身説である。信実の祖父にあたる藤原為経(出家して寂超と号す)作とされる歴史物語『今鏡』では、『法華経』妙音菩薩品からその化身とする。

「(前略)世間では紫式部が地獄に堕ちているとばかり申しておりますが、道理をわきまえている人がおっしゃるには、日本でも唐土でも文章を書くことで人の心を晴れ晴れとさせ、暗い心を導くのは常のことです。妄語などというべきではありません。これ(源氏物語)はこうあってほしいと願っていることであって、綺語とも雑穢語などといってもそれほど深い罪ではないでしょう。(中略)

生きとし生けるものの命を奪い、ありとあらゆる宝を奪い取りなどする重い罪ある者でさえ、地獄の底に沈みはしてもいかなる報いがあると耳にしたことはないのに、かえって不思議に思われます。源氏物語に人が心を寄せることは、功德にこそなれ、情愛をかけ、色めくことはたとえ輪廻の業にはなっても、地獄に沈むほどの罪でありましょうか。(中略)

唐土の白楽天と申した人は七十巻もの書物を著して、文に技巧を凝らし譬えを引いて人の心を(仏道)に勧められたといたしますのも、文殊の化身とこそ申します。仏も譬喩経などといって実際にはない事を作り出され、説き置かれていらっしゃるのもけっして虚妄ではないそうです。(紫式部は)女の御身であれほどの物語をお書きになったのは、常人ではいらっしゃらないのでしょうか。妙音菩薩などと申す尊い聖たちは婦女に変身なさって仏法を説き、人々を導かれるそうです」(「作り物語のゆくへ」)

創作は仏道修行の方便であり、それを通じて精神的深さを増し、仏教的な境地を得られるという考えは、西行ら歌人たちが拠りどころとした。

(大学院仏教学専攻博士前期課程2年 永田道子)

## ～ 書籍・イベント紹介 ～

### 《書籍》

#### ・『『正法眼蔵』で生きる智慧』

公方俊良/著 (サンガ 1,554円)

『正法眼蔵』の全巻の中から、核心というべき教えを抽出し、それらの珠玉の言句を、身近な事例を通して平易に解説。

ダライ・ラマ 14世テンジン・ギャツォ/著 マリア・リンチエン/訳 (大蔵出版 1,995円)

自らはより厳しい民族的苦難に直面しながら、やさしさと思いやり、そして冷静な現実把握により、日本人を励ます、珠玉のメッセージ!!

#### ・『ダライ・ラマ 未来への希望』

・『空海の企て—密教儀礼と国のかたち—』

山折哲雄/著 (角川学芸出版 1,575円)

天皇と国家の鎮護に密教儀礼を持ち込み、国家統治と今日の象徴天皇制につながるシステムをつくった空海。密教思想と国家のかかわりを描いた画期的な空海論。

・『週末からはじめる修行のススメ』

修行のススメ取材班/編集 (山海堂 1,680円)

宗教体験から僧侶になるための方法まで、幅広く紹介し、インタビューも入ったガイドブック。

・『『教行信証』入門』

矢田了章/著(大法輪閣 3,150円)

円熟期の親鸞が、浄土真宗の救いを壮大なスケールで述べた名著『教行信証』。本書は、その重要箇所の訓読と現代語訳を解説しつつ、この1冊でその全体を展望します。

・『仏教思想へのいざない—釈尊からアビダルマ・般若・唯識まで—』

横山紘一/著 (大法輪閣 2,205円)

釈尊の説いた三法印などの基本思想はもちろん、心と物質の分析を説くアビダルマ・唯識、中道を説く般若思想などを網羅しています。

・『三大宗教 天国・地獄 QUEST—伝統的な他界観から現代のスピリチュアルまで—』

藤原聖子/著 (大正大学出版会 1,470円)

死んだらどこへ行くのか?それぞれの死生観の違いと共通性を理解することにより、世界の調和を、新しい角度から考え直す。

・『一日10分の坐禅入門—医者おすすめの禅のこころ』

—』

高田明和/著 (角川書店 720円)

医者を経験から編み出したこころとからだに効く坐禅習慣。

・『鎌倉仏教展開論』

末木文美士/著 (トランスビュー 3,990円)

鎌倉時代を、親鸞・道元・日蓮らが代表する新仏教の時代と見るのは、一面的な見方にすぎない。鎌倉仏教観を変えた顕密体制論をさらに超えて、この時代の思想を総合的に捉えようとする斬新、意欲的な論集。

・『親鸞思想の原点—目覚めの原理としての回向—』

本多弘之/著 (法蔵館 2,940円)

愚かな人間にこそ本当の救いが与えられる。人間の弱さや罪深さを徹底的に自覚することで生み出された親鸞の救済思想の根本意義を、親鸞教学の第一人者が解き明かす。

・『いきなりはじめるダンマパダー—お寺で学ぶ「法句経」講座—』

釈徹宗/著 (サンガ 1,680円)

仏教のバイブルと言われる『ダンマパダ』を解説。ライブ感あふれるユニークな仏教講座ここに開講!

・『インド人の考えたこと—インド哲学思想史講義—』

宮元啓一/著 (春秋社 2,415円)

IT技術、インド式数学、ヨーガブームなどで話題のインド。その魅惑的な思想・哲学の流れをわかりやすく語る。

・『かわいいぶつぞう ふしぎなちから』

峯村富一/著 井筒信隆/監修 (春秋社 1,260円)

仏像50尊を愛らしいキャラクターに変身させて、大胆なキャッチフレーズとユーモアたっぷりの解説文を添えて紹介する。仏像たちの性格や図像的特徴、ふしぎなチカラ(ご利益)、出会える場所(寺院)なども掲載。

《イベント》

冬から春にかけて行われる仏教イベントです。

● **東京国立博物館 特別展「妙心寺」**

妙心寺開山無相大師[かいさんむそうだいし]650年遠諱[おんき]を記念した展覧会。禅の精神と文化を、妙心寺本山ならびに塔頭[たっちゅう]の所蔵品(国宝4件、重要文化財およそ40件)を中心に紹介。

日時: 2009年1月20日(火)~3月1日(日)

午前9時30分~午後5時

\*休館日は月曜日。

会場: 東京国立博物館平成館(上野公園)

拝観料: 一般1500円、大学生1200円

● **円覚寺座禅会**

暁天座禅 毎日6時~7時(11~3月)

土曜座禅 毎週土曜 14時~15時半

日曜説教座禅 第2、4日曜 9時~11時

\*座禅会 予約不要、料金無料

● **南無の会社説法(東京)**

毎月第2水曜に行われるこの集りは、特定の宗派にこだわらず、広く仏教を学ぶ方のための集まりです。1月14日には松原哲明先生の「面白い公案」についてのお話。2月4日には竹内泰存先生の「賢治の苦悩」についてのお話があります。

日時: 毎月第2水曜日

午後7~午後9時(受付6時30分~)

会場: 常円寺(JR「新宿駅」西口徒歩10分。西武「新宿駅」5分)

参加費: 1000円

お問い合わせ: 03-3754-6194

● **武蔵野大学公開講座(日曜講演会)**

武蔵野女子学院理事である山田 英昭先生が、「無量寿にかえる」についての講演を、なさいます。

日時: 2009年1月11日

10:00~11:30

会場: 武蔵野大学5号館(グリーンホール)

参加費: 無料

● **チベット仏教普及協会(ポタラ・カレッジ)**

月例法要 第4日曜 18時45分

瞑想教室 毎週日曜 15時15分

般若心経勉強会 毎週土曜 13時半

お問い合わせ: 03-3251-4090

● **成田山写経道場**

日時: 年中無休 受付8時~15時

初穂料: 写経『般若心経』2000円

写経「御不動様御宝号」1000円

お問い合わせ: 0476-22-2111 (午前8時~午後4時)

● **実相寺**

信行会: 第1日曜13時(唱題・読経・法話)

盛運祈願会: 第1土曜15時(ご祈願会)

仏教カレッジ: 第2水曜19時(『仏教聖典』)

子供会: 第2日曜14時(偉人伝や法話)

お問い合わせ: 048-222-4566

● **金剛院仏教文化研究所**

館野正生講師によるインド思想史講座。

日時: 第3月曜15時(原則として変更あり)

会場: 金剛院会館研究室

テキスト: 『インド思想史』(東大出版会)

お問い合わせ: 042-625-7560

● **青松寺**

信田さよ子先生による、「家族再生の道」の御話。

日時: 2009年1月29日 17:30~

庄司進一先生による、「生と死の教育」の御話。

日時: 2009年2月26日 17:30~

お問い合わせ: 03-3431-3514

他にもありますが、掲載できませんでした。残念です。

東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ~

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先にお願いいたします。(会員は無料です。)

### 《定例全体研究会》

活動報告や渡辺先生の講義「大智度論を読む」などを行います。

※当初お知らせした日程を変更させて頂きました。ご確認ご了承下さい。

第9回 1月14日(水) 16:00~18:00、3305教室(白山校舎3号館3階)

第10回 2月25日(水) 16:20~17:50、第3会議室(白山校舎6号館1階)

○第9回研究会の日には、渡辺先生のご友人であるジョナサンシルク先生のご講演もあります。シルク先生は日本語に精通し、ユーモア溢れる語り口で著名な先生です。ぜひご参加下さい。

東洋大学東洋学研究所 講演会

ジョナサン シルク

(ライデン大学教授、仏教学、

東洋大学共生思想研究センター海外客員研究員)

#### 「ライデン大学における東洋学」

日時：1月14日(水) 14:30~16:00

会場：6302教室(白山校舎6号館3階)

聴講無料

### 《語学勉強会》

※日程については要確認。いずれの講座も初級者の参加が可能です。

#### ○サンスクリット語文献の読書会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日 13:00~14:30

場所：文学部会議室(白山校舎6号館4階)

内容：インドの説話文学の講読

#### ○チベット語仏教文献の読書会

講師：石川美恵

日時：隔週土曜日 14:00~15:30

場所：インド哲学科共同研究室(白山校舎6号館4階)

内容：初等文法を兼ねたチベット語仏教文献の講読

#### ○漢文仏典講読会—『成唯識論』を読む—

講師：橘川智昭

日時：隔週木曜日 14:40~16:10

場所：セミナー室1(白山校舎5号館2階)

内容：『成唯識論』を読みながら、漢文と仏教思想を学ぶ

※紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、以下のアドレスまでご一報下さい。

※現在新入会員を募集しています。入会希望者は以下までご連絡下さい。

※会員規約や活動内容などの詳細はホームページ (<http://www.toyo-yimba.org>) をご覧下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科3年 藤浪崇裕(東洋大学仏教青年会広報)

編集協力：大学院仏教学専攻博士後期課程3年 櫻井宣明(東洋大学仏教青年会会長)

文学部インド哲学科1年 高木俊次、藤井明

#### 東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: [tba.bussei@gmail.com](mailto:tba.bussei@gmail.com) URL: <http://www.toyo-yimba.org>

#### 東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 櫻井宣明

db0600029@toyonet.toyo.ac.jp